

日本はきもの博物館収蔵資料紹介

～ 18世紀後半の靴～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市 田 京 子

はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料を紹介させていただいており、今回はその資料441点から、18世紀後半の靴を取り上げる。

ファッションが社会の様相を反映しているのは現在も変わらないが、18世紀後半はフランスの王政がルイ15世から16世へと移り、繁栄の足元が揺らぎ変革の兆しがみえ始める時期であった。それを受けるかのような変化がみられる1760年頃から1780年代の靴を紹介する。

なお、掲載する写真は全て日本はきもの博物館所蔵である。

1. 18世紀後半前期の靴

18世紀前半の靴は細く尖って反った爪先が特徴であった。最初の変化は、1760年頃からその爪先が丸くなることに表れる。ルイヒールは太いままやや低くなり、落ち着いた雰囲気になる。



写真1. フランス

写真1は、ダークピンク地にシルバーを織り込んだシルク・ブローケードの靴で、裏打ちは白リネン、履き口やストラップはシルクのリボンテープで縁取ってある。このテープの縁取りは、18世紀から19世紀まで続き、甲材と同じものや同色系の生地が用いられている。

この靴のブローケードはあまり緻密な織りとはいえず、そのためか、爪先や側面など靴の前方には多色のシルク糸で花などが刺繍されている。また、底革との間には白い革を細くはさむランドがみられる。

全長22.9×幅7.6×全高10.8cm、ヒール高5.5cm。

博物館にはこのタイプの靴が他に3足あるが、うちブローケードの使用は1例で、ブローケードとしては質もよくない。白革をはさむランドは1例もなく、これ以後の靴にもほとんどみられない。素材や作り方の変化があったと思われる。

写真2も丸い爪先の靴で、伸びがないためか高いヒールとのバランスが不安定である。側面からみたヒールの形状は1720年頃



写真2

のものに近いようにもみえる。甲表とヒールはブルーのシルク・サテンで、甲中央に銀糸モールの飾りがある。ストラップは短く、リボン結び用の小穴があき、その前に幅広のリボン飾りがつく。裏打ちは前部が白いシルク地、後部が白い革で、布と革を併用するのも新しい要素である。

全長21.6×幅7.5×全高13.0cm、ヒール高8.2cm。

流行というのは画一的であるようで、必ずしも全く同時期・同スタイルとはいかない、というか、同じようであるが、特異性、個性のあるものがみられるものであるが、この時期の靴にもそれが感じられる。カラーページに掲載した靴もあわせて、丸い爪先にも太めのヒールにもそれぞれの独自性が強い。ただ、丸い爪先にあわせるように比較的安定感のあるフォルムであることが特徴となっている。

2. 18世紀後半後期の靴

June Swann氏（注1）によると、再び爪先が尖るようになるのは1785年のことだという。博物館の収蔵品からみると、伸びのない丸い爪先がそのまま細い尖りをもつようになり、その後、伸びをもって尖っていくようである。そして、それにあわせて、ヒールは細く高いものからやや低いものに変わっていく。

写真3はアイボリーのシルク紋織り（スプリット）で、短いストラップの合わせ目に同じ素材のロゼッタ飾りがつけられている。爪先はやや細くなっている。写真4も同じ素材のきれいなピンク色のもので、バックル留めとなる。いずれもヒールは高く、下部の細い部分が長くなるため非常に不安定で、爪先の接地面が少ないこともあり、自立が難しいほどである。このタイプのヒールをイタリアン・ヒールという。



写真3. イギリス



写真4. イタリア



写真5. イギリス

写真3：全長21.9×幅6.7×全高12.0cm。
ヒール高7.0cm。

写真4：全長20.9×幅7.0×全高12.0cm。
ヒール高8.0cm。

写真5は退色が著しいがパープル、6はピンクのシルク・サテンのもので、爪先が伸びることで接地面が大きくなり、ヒールが低くなっている。ルイヒールの特徴である上部の大きなカーブはそのままに、下部が短くなったために、フォルムの美しさは損なわれても安定感がある。

写真5：全長22.1×幅6.5×全高9.8cm。



写真6. イギリス



写真7. イギリス

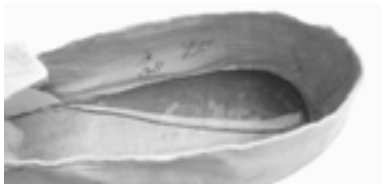


写真8. 写真5の内底



写真9. 写真5の外底

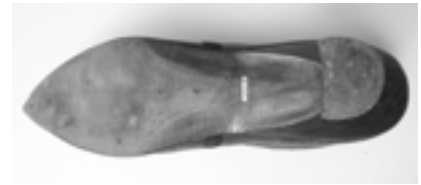


写真10. 写真7の外底

ヒール高5.4cm。

写真6：全長22.8×幅7.3×全高10.0cm。

ヒール高5.1cm。

写真7は1785年頃のものであるが、幾つか特異な点がみられる。まず、甲の素材が、これまであまり例のない革となっている。黒い染色は技術が高度でないためか剥離がみられる。バックルやリボンという留め具のないもので、履き口の縁取りや側面中程の継ぎ目には黒のシルクテープが用いられ、同じテープのロゼッタ飾りがある。甲の裏打ちは前部が白生地、後部が白革で、内底にも白い革が貼ってある。また、底と同じ白革片が踵部内側に貼られており、カウンターに比される補強かもしれない。ヒールは艶のある黒革で巻かれており、やや高めであるが安定感がある。

底革の中央両端に色の濃い部分がみられる(写真10)のも新しい要素で、濃い部分は革も硬くなっている。ただ、それが左右の違いを示すとはみえない。革に硬さを出すためのものだろうか。

この靴には、後段で紹介するオリジナルのオーバーシューズが付いている。

全長21.2×幅6.5×全高11.4cm。ヒール高8.4cm。

外底は厚みのある革で左右同形に作られているが、革に柔らかさのあるもの(写真9)もみられ、内底には薄い革を重ねて、その上に白の革やコットン・リネンなどの布地を貼ってある(写真8)。甲部の芯材はまだなく、踵を支える芯も入らないが、写真7のような要素も出てきている。

3. オーバーシューズについて

ヒールの出現について、パリの街通りの汚さから靴を保護するためかと聞かれることが多い。筆者には正確な答えはないのだが、ここで紹介するオーバーシューズの存在はそれを否定しているように感じている。

写真11は木製の台に鉄製の脚部をつけたもので、Swann氏によると、爪先の形から1770年代のものという(注2)。写真12は平らな底の革製で、ストラップと側面にシルク・サテンを貼り銀糸ブレードで装飾した豪華なものである。装着は写真14のような形になり、貴重だったヒールを保護するものと考えられる。



写真11. イギリス



写真12. イギリス



写真13. 写真7に付属

博物館ではどちらもパトンpattenとしているが、Swann氏は後者をクログclogといている（注3）。確かにパトンは15世紀に出現した二枚歯のような支えのある木製のオーバーシューズの系譜にあるものを呼ぶ語かもしれない。

そして、写真7の靴にはヒールを保護しないものが付属している(写真13)。革製で、後端に付けた輪にヒールを通して用いるもの(写真15)で、靴の甲部の保護しか念頭にないといえる。写真13は、表面がほぼ剥離しているが、革は靴の甲と同材であり、輪はコイル状の金具を白革で巻いた伸縮性のあるものになっている。

写真11：全長19.6×幅8.5×全高6.4cm。

写真12：全長18.3×幅8.2×全高5.4cm。

写真13：全長21.3×幅7.2×全高6.3cm。

靴が高価で貴重だった時代「馬車から降りて屋敷まで」などともいうが、屋内でも靴を履くこともあってか、欧米ではオーバーシューズは様々な形を生んで、20世紀のゴム製ブーツの時代まで続く。

おわりに

この時期の靴には不安定さがつきまとうとを感じる。自立しないまま揺れる高いヒールの靴の美しさと危うさに時代を感じてしまう。しかし、ヒールが登場して200年、靴の完成にはまだ遠いが、美しさと履き易さの間を揺れながら、少しずつ発達していくもののようなものである。

今回は18世紀末期から19世紀初頭の靴を紹介する。

注

- 1) June Swann氏はイギリスのノーザンプトン・ミュージアムで長年靴の研究に携わった方で、1994年日本はきもの博物館に来館。
- 2) このパトンは、博物館初期の収集品でアメリカから購入したが、時期などが明確ではなく、17世紀としていた。
- 3) June Swann"Shoes", B.T.Batsford Ltd. London (1982), カバー表、27ページ



写真14. 靴はNo.157の写真8



写真15

18世紀後半の靴 —日本はきもの博物館所蔵—

1780年頃の靴。
フランス。シノワズリー・モチーフのベルベット、ヒールはシルク・サテン巻き。
オリジナルのバックルが残る。
全長21.2×幅7.5×全高12.4cm、ヒール高7.5cm。



1780年頃の靴。
畝織りのようなシルク地に、シルク・サテンのリボンテープの飾り。
ヒールは革を巻く。
全長20.0×幅6.5×全高10.9cm、ヒール高5.5cm。

1770年頃のミュール。
フランス。シルク・ブロードにレースやリボンテープのバラなどの装飾。
内底は革、ヒールも革を巻く。
全長20.3×幅7.1×全高7.3cm、ヒール高7.0cm。

